

## 世界文化遺産登録について

宗像地方の聖なる沖ノ島と関連遺産群は、2017年に日本の21件目のユネスコ世界遺産に入りました。沖ノ島を中心とした地域の特徴は、国内の他の世界遺産と一線を画しています。沖ノ島で発見された8万点を超える膨大な数の品に加え、発見された場所と品々の整合性が顕著で、普遍的価値がある場所にしました。島を管理する厳格な禁忌は、その品々が何百年も手つかずのままである可能性が高いことを意味しました。

## 儀式の発展

沖ノ島のさまざまな場所で発見された品々を調査した結果、沖ノ島で最初に知られる儀式では、太陽と月に開かれた岩の上に奉獻品が置かれたと研究者が結論付けました。5世紀頃には奉獻品は島の中心付近の大きな丸石に置かれました。これらの場所では鏡や鉄塊が発見されています。その後2世紀の間に、深い張り出しの下にある大きな岩の陰の地点に移動しました。8世紀頃には岩の部分的な日陰で儀式が行われるようになり、9世紀頃には現在の沖津宮の社殿近くの開けた場所奉獻品が置かれる様になりました。これらの発見は、自然崇拝の一形態としての神道の起源から、神道の発展への貴重な推移の様子を示しています。多くの奉獻品は、早くも4世紀からの日本とアジアの近隣諸国との盛んな交流と、宗像氏が日本の初期の支配者の下で享受していた名声も明らかにしています。

## 未来に向けた過去の保存

儀式の形態が変化し、9世紀以降に大島や九州の海峡を越えての信仰が一般化しても、島の重要性は衰えませんでした。沖ノ島は、島内で献上された奉獻品や、九州や大島から遠く離れた距離での崇拝を通じて、聖なる島を信仰する伝統の特別な例としてユネスコにより宣言されました。最終的には、この地域の伝統を千年紀以上にわたり守り続けてきた地元の人々の献身のおかげで、沖ノ島とその周辺地域の重要な発見が世界に共有されることができたのです。